interview

縁に導かれて

国語科教諭　遠藤　大和

縁あって、軍記物語を専門に

――よろしくお願いします。

こちらこそよろしくお願いします。

――遠藤先生といえば、本校の卒業生ということで。何年度の卒業なのですか。

平成元年に入学をしまして、平成４年の３月の卒業です。年度と学年とが一致している点で、ちょうど区切りの良い学年ですね（笑）。かれこれ32年前のことになります。

――ご専門は何だったのですか？

中世の軍記物語を専門としていました。例えば平家物語[*1]や義経記[*2]などですね。それで学部の時は、平家物語と仏教というテーマで研究をしていました。

*1 平家物語　鎌倉時代の軍記物語。平家一門の栄華とその没落・滅亡を描く。

*2 義経記　室町中期成立の軍記物語。源義経の幼年期や弁慶の活躍を描く。

――なるほど～。

本当は中古の平安時代の方が、国文学をやろうとしたきっかけの作品があったのです。しかしいろいろな縁があって中世を扱うことになり、そのまま大学院でも中世の軍記物語をやらせていただきました。

――ひとくちに古典といっても、様々な時代区分に分かれるのですね。

そうですね。文学史では古い方から上代、中古、中世、近世、近・現代、現代というふうに分かれます。

――国文学をやろうと惹かれたというのは、何がきっかけだったのですか。

元々は国語がとても苦手だったのですよ。高校１年生くらいまでは社会系の分野で大学に行けたらと思っていました。中学時代は数学の方が得意だったくらいです。しかし、古典が苦手だったことで授業の予習とか復習をしていたら、段々と面白くなってきまして。

当時教えてくれていた桜井先生[*3]の授業が面白くて、段々と古典を専門にしてみたいと思うようになりました。もちろん、２・３年次に担任だった関口先生[*4]の影響もありましたが。そこで更級日記[*5]に出会いまして、主人公の女性はどういう気持ちだったのだろうというこ

とに興味を持ち、途端に古典が好きになり、できるようにもなり、大学でも古典をやろうと思ったのです。両親を説得するのは大変でしたが。

*3 桜井幸男先生　保善ニュースに連祝した『「壬申の乱」ノート』は 72 回にも達した。

*4 関口榮司先生　本校国語科教諭を経て，2007 年度から 2018 年度まで本校の校長を務めた。

*5 更級日記　平安後期の日記。高等学校の古典の授業で扱う。

――といいますと？

私の家は、飲食店を営む商人の家庭なので、経済とか経営、商学部といった方面に行ってほしかったようなのです。

――遠藤少年が、文学部に行きたいというのも、ご両親にとっては寝耳に水[*6]だったのではないですか？

まあ、父も元々は法学部出身で、本を読むのも好きだったので、大反対というわけではなかったです。ただ、その道で食べていけるのか？？ というのは言われましたね。

*6 寝耳に水　ことわざ。不意のことが起こって驚くことのたとえ。

――ご専門が軍記物語になった経緯というのは、どういったものだったのですか。

先ほど、縁という言葉を使ったように、人とのつながりなのですよ。高校での担任だった関口先生のご学友の先生が、大学の教授としていらっしゃいました。その先生は中世の僧侶の専門で、大学１年次から面倒をみていただいてもいたので、その流れでという感じですね。まあでも大学で授業を受けて、軍記物も面白いなと思ったこともあります。だから平安時代は自分の趣味の中で読むことにして、少し異なる分野にチャレンジしてみようと思い、仏教との関わりを勉強することにしました。

――仏教にもいろいろ宗派があると思われますが。

大乗仏教と小乗仏教の違いというのが大きいです。どうしても中世の時代ですと、大乗仏教のほうが大きく関わってきます。ただ、これはマニアックになってしまうのですが（笑）、平家物語には異本[*7]がたくさんあって、覚一（かくいち）本とか延慶（えんぎょう）本とか、ハリヤキリシタン本とか百二十句本とか、いっぱいあるのですよ。

*7 異本　同一の書物であるが、一般に流布している本文と大きな異同のあるもの。

――へ～え。

琵琶法師[*8]による歌詞なので、元々の文章というものがなく、いろいろな人がいろいろな解釈で作った本があります。ですから、実はちょっとした宗派の違いで内容が異なっていたり、途中で挿入される和歌が逆転していたりするのです。そこを大学、大学院を通じて研究していました。

*8 琵琶法師　僧体で琵琶（弦楽器）を弾ずる芸能者。

――たしかに琵琶法師の語りが文字で残っているというのは不思議ですね。琵琶法師自身が書き記したわけではないですよね。

琵琶法師はさまざまな所を訪れ、「講」という、いうなれば講演会のようなものを開いていました。聴衆はそれを聞く。娯楽ですよね。それを文字で書ける人が書いていたわけなのです。そしてそれをさらに手書きで写していくので、どんどんいろんなバージョンに分かれていったのです。平家物語の場合には、特にこのように誰か１人が書いたものを写しているわけではない、というところに特徴があります。

縁あって、母校で教諭に

――ところで、本校に奉職するきっかけは何だったのですか？

何でしょうね？（笑）わからないです。
大学４年生のときに、教育実習で保善にお世話になりました。指導教員は奈佐先生*9です。手厚く指導いただきまして、次年度から非常勤講師をやらないか、とお話をいただきました。そして翌年から、本校で非常勤講師をやりながら大学院のほうにも通っていました。これも縁、といえるのかも知れません。

*9 奈佐有記先生　本校国語科教諭。生徒指導部長と空手道部顧問を務める。

――その頃には桜井先生はいらしたのですか。

桜井先生はいらっしゃらなかったですね。

――奈佐先生も、本校に赴任してからそんなに経っていない時期ですよね？

まだ 10 年経っていないくらいかなあ。ちょうど高橋良二先生*10が亡くなった年でした。

*10 高橋良二先生　本校体育科教諭。惜しまれつつ 1997 年に亡くなった。

――初めて担任を持たれたときの思い出などはありますか？

非常勤講師の時代が長かったこともあり、他の学校に行って甘えな

い方がいいなという考え方も持っていました。しかし、本校で専任にならないかという話をいただき、私と吉田先生*11が同期で入ったのですよ。まさか自分が母校で、という思いもありました。

そしてベテランの芳沢先生*12のところに副担任でつきました。嬉しさというよりは、自分の後輩をしっかり作っていかねばという気持ちが強かったです。自分で担任を持った生徒に対してもそのような思いがありました。今でも、初めて担任した生徒たちとは連絡を取ったりしていますよ。

*11 吉田忠裕先生　本校国語科教諭。３年生の学年副主任。
*12 芳沢圭史先生　本校数学科教諭。長らく学年副主任を務めた。

――そういえば、今年は２年生の学年副主任として、修学旅行で沖縄にいらっしゃいます。

今年はコロナ禍の影響で、修学旅行で民泊体験をすることが難しくなりました。その代わりに久しぶりに伊江島*13を訪れます。私自身は、伊江島は担任になる前の時代に１回、担任として１回、そしてプライベートで１回訪れただけなのです。かつてとどれくらい変わっているのか楽しみですね。

*13 伊江島　沖縄県の北部にある島。本部港から船で渡る。

――ご自身が生徒の時は、修学旅行先は沖縄だったのですか？

私は九州での修学旅行を経験したの最後の学年なのです。当時も沖縄に行っていた学年はありましたが、私の学年は学年主任の石坂先生*14のたっての思いで九州でした。九州もハードな修学旅行でしたけれどもね。６泊７日で全県回るのです。新幹線で博多まで行って、そこから時計回りに九州を一周。１日すべてバスで移動、という日もありました。

*14 石坂信行先生　本校社会科元教諭。学年主任も務めた。

――九州だと、何を見るのですか。

九州の時代も、平和学習がメインでした。知覧特攻隊*15や、長崎の原爆を軸にしながら、高千穂峡などの景勝地も巡りました。今でも情景のイメージが残っています。

*15 知覧特攻隊　鹿児島県南九州市の知覧には、かつて陸軍飛行場があり、特攻隊の出撃地であった。

母校の節目を見つめて

――本校の 100 周年が目前に迫っています。ＯＢとして、どうですか？

そういう節目に卒業生として立ち会えるというのは縁も感じます。様々な意味で恩返しもしなければならないという思いも抱いています。…とにかく保善高校と遠藤家は縁というか、因縁が強いので。父がラグビーの全国大会の決勝で負けたのが保善ということもあります。兄貴も保善高校で、芳沢先生のクラスで卒業していきました。何か、縁が深いのでしょうね。（笑）

――これから 100 周年をともにする、中学生や保護者の方、あるいはＯＢの方々に向けて、ひとことお願いします。

100 周年はまたひとつの区切りなので、100 年経った保善高校は保善高校で、評価される点や、ひとつのスタイルがあるように思います。でもこれからの新たなものは新たなもので作っていくべきだと思いますし、必ずしもこれまでの全てを踏襲する必要もないとも思っています。これからの保善高校を、一緒に築ける希望を持った生徒の皆さんと、高校生活をともに送っていきたいと思っています。

――遠藤先生は、国語科の主任も長く務められました。今後の国語教育についても、ひとことお願いします。

質問が堅いな（笑）。国語科主任は７年間やりました。国語という教科は、今後さらに教授内容や教授法が変わってくる教科だと考えています。これまで通り、文章を読んで解釈することも必要です。古典などの場合は特にそうです。他方で、最近の傾向では、与えられたものを利用して自分で考えたことを高校生でも発信できるようになっていかなければなりません。解釈に加えて表現力が必要になってくるということです。そして、そういうことができるような科目内容が、我々の側にも求められているように感じます。国語科の若い先生方には、その点でも期待をしています。

――若手の三保谷先生[*16]も OB で、安永先生[*17]と遠藤先生が担任していたのですね。遠藤先生も師匠、師匠と慕われていらっしゃいますが…。

いやいや、彼は私を見下していますよ（苦笑）。でもああいう人が出てくるから、保善の今後も安心といえば安心です。私自身も負けないようにしなければならないですよ。

*16 三保谷遼先生　本校国語科教諭。特進部に所属し、ICT 教育導入の推進にも尽力する。

*17 安永武仁先生　本校国語科教諭。2018 年から教頭を務める。

奉職してから始めたバドミントン

――ところで、バドミントンの顧問になったきっかけは、何だったのですか。

奉職当初は、自分は軽音楽部の顧問だったのですよ。かつては、音楽の先生が吹奏楽部も軽音楽部もかけもちで顧問をしていました。しかしそれは無理があるだろうと、当時学年主任であった近藤先生*18のアドバイスもあり受け持ったのです。ただ私もスポーツをやっていた人間です。そこで国語科の大先輩だった永塚先生*19が当時顧問をされていたバドミントン部が、若くて活きのいい顧問も欲しいということで、その縁でお手伝いを始めたのがきっかけです。

*18 近藤八朗先生　本校地歴科教諭。剣道部顧問であり、また長らく学年主任を務めた。

*19 永塚三郎先生　本校国語科元教諭。長らく、本校発行の新聞である保善ニュースの編集長を務めた。

――それまではバドミントンのご経験は。

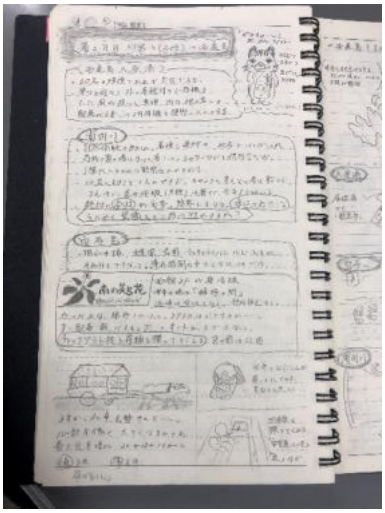
ありませんでした。大学の授業で一回やったことがあるかどうかくらいです。だから講習会で習いに行ったり、他の学校の先生から情報を得たり、練習方法を教わったりと、様々に試行錯誤しました。

しかし、何よりも自分でやることが重要ですね。自分でやったうえで、指導をこうしたらいいんじゃないかとか、試合を見て強いチームの動きを見て学んで、確立してきたところはあります。

――今は結構な腕前で。

でも最近は体力がなかなかね。あまり打っていないし……。それでも、生徒と３ポイントマッチで対戦するくらいまでなら、なんとかいい勝負になるかも知れないです。

私が顧問に就いた頃は、まだマイナー競技だったのです。その頃は部員が３人とか５人とかで。しかし、今では部員数も増えたので、嬉しい限りです。合宿は楽しかったですね。飯山市の戸狩温泉とか、那須にも行ったかな。



――ちなみに、イラストもお上手ですよね。

兄貴がイラストがうまくて、その兄貴に負けないためにいろいろ描いていたのです。

でも何かをみてコピーして描く、というのは比較的得意なのですけれど、景色などを見てイキナリ描け、というのはそこまで得意ではありません。メモや授業などでも、言葉で書くだけより、絵で描いた方が良いだろうなという思いがあります。妹尾河童の『河童が見たヨーロッパ』などの影響を受けているかも知れません。

――以前見せていただいた、石垣島のイラストが印象に残っています。本日はお忙しいなか、どうもありがとうございました。

voice　釣りの魅力にハマる

9月に行われた「バリバスカップU-18選手権東京湾LTマアジ釣り大会」で準優勝に輝いて注目を集めている本校釣り研究部．今回は部長の宮本港斗君(3年5組)に，顧問の山田優先生，編集部の細谷先生がインタビューをしました．

兄弟揃って釣り研です

細：　本日は釣り研究部の宮本港斗(みなと)君にインタビューします。それではよろしくお願いします。

お願いします。

細：　名前に「港」という字が入っているのは、もしかして何か釣りと関係しているのですか?

そうです。僕のお父さんの趣味が釣りでして、名付けの際に、港のようにこの子の周りに人がたくさん集まってくれたらいいなという願いを込めて、この名前をつけてくれたそうです。

山：　そうかな～という気はしていたんです(笑)

細：　やはり釣りと関係していたんですね。お父さんは釣りが好きなんですね。小さい頃とか、釣りに連れて行ってくれたこととかあるのでは?

小学3、4年生くらいから父と一緒に釣りをしていました。主に川釣りの方です。年齢が上がっていくと海釣りにも連れてってもらいました。

細：　中学校でも釣りを?

はい。

細：　中学校にはさすがに釣り研究部はなかったよね?

　そうですね。

細：　どれくらいの頻度でいくのですか?

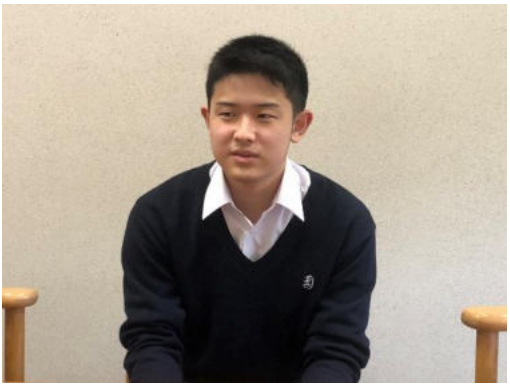
　どれくらいと言っても、長期休暇のときに行くくらいです。

細：　保善高校に釣り研究部があると聞いて、これはすぐに入部しなければと思いましたか?

　というよりかは、私の兄が保善の卒業生で、兄も釣り研究部で部長でした。

細：　なるほど、兄弟そろって釣り研究部だったんですね。じゃあ入学前から入部する気満々だったんだね。

　はい。文化祭などで顧問の先生と話したり、また兄から話は聞いていたので、入ろうかなとは思っていました。



釣れた瞬間の快感

細：　今３年生ですよね。高校生活も終わりが近いですが、釣り研究部の思い出で一番のものは?

　やっぱりこの前の大会ですね。(注)

細：　何のスポーツ紙に載ったんでしたっけ?

山：　スポーツニッポンですね。

細：　あの大会自体は有名な大会なのですか?

　私たちが出たので二回目だったと思います。

細：　対象は高校生だけ?

　中高生だったと思います。10 校ぐらい出場して、２位でした。

細：　釣りとは運も多分にあると思うのですが、実力というのも大きいんですか?

僕の中では運６割、実力４割だと思っています。

細：　ちなみに実力や技術というのにはどんなものが含まれるんですか?

やっぱり投げる位置だとか、糸を引くの強弱だとか、ルアーの場合はどれくらい泳いでいるように見せかけられるとか。今回の大会の場合はカゴに餌を入れて餌を撒き散らすのですが、落とした後、針が餌にまぎれているか、とか。

細：　奥が深いですね。釣りが好きになった理由というのは?

魚がかかるとき、クイッとくるのですが、それでオッとなって釣れた時の瞬間というのが嬉しくて、やめられなくなります。

細：　それがたまらないと。素人な質問なのですが、この魚を釣りたいと思っても釣れないじゃないですか。釣りたいと思った魚はどれくらいの割合で釣れるものなのですか?

僕が行ったことがある釣りはアジと太刀魚、この二匹ぐらいしか釣れなかった。種類や場所によるので細かくはわかりません。

山：　この間の大会では隣の子が黒鯛を釣っていましたね。あれは偶然なのでしょうけど。

細：　黒鯛は難しいのですか?

仕掛けがアジ釣り用なのに黒鯛が釣れたのが珍しいってことだと思います。

細：　大会は何で勝敗が決まるのですか?

５人１組でやって、５人それぞれが釣った魚の中で最も重い魚の合計で競います。今回は４名で参加したので、もう一匹については全員が釣った魚の中から次に重い魚を選びました。

細：　つまり大きな魚を釣ることが難しい、という理解でいいんですか?

そうですね。僕も最後の１時間だけ大きな魚を釣るスポットに行ったんですけれども、３、４回ぐらいかかって一回ぐらいしか釣れませんでした。

山：　逃した魚はデカかった?

デカかったですね。腕が筋肉痛になるぐらい。

山：　リールもキコキコいってたしね。あと道具も古かったしね。

細：　道具は向こうが揃えている?

そうでした。持参もOKでしたが。

山：　リールとか高い道具の方が良かったりするのですか?
リールだったら巻きやすかったり、竿であればしなりやすかったりしますが、まあ、結局は(魚が)かかるか、かからないかなので。

山：　ちなみに竿やリールはどれくらい持っていますか?

2、3本、リールも2、3個です。

山：　人によっては集めるのが趣味という人もいますよね。

僕の父がそうです(笑)。

細：　そうなんだ(笑)。

会社の下に釣具屋があったらしく、そこに毎日のように行っていたそうです。

山：　君はそんなことないんですか?　釣具屋に行ってニヤニヤするとか。

僕は…ないですね。

山：そうですか(笑)

山：　私も昨年から釣り研究部の顧問になったのですが、釣れたときの快感はたまらないですよね。あの感覚をまた味わいたいと。

変な中毒になりますよね。

細：　ちなみに「魚を食べたいから釣りをする」という動機はないん

ですか?

　というよりかは、小さい頃は父について行っていたので、あまりそういうことは考えてなかったです。

山：　小学生の頃にやっていた川釣りというのは、トラウトですか?

(注)トラウトとは鱒のこと。

　そうですね。ニジマスとかヤマメとか。

山：　お父さんはルアーで?　それともエサ釣り?

　父はいろいろな釣りをしていたので、何かメインでということはなかったと思います。でも、一匹の魚を釣りに海外に行ったりはしていましたね。

山：　ほんとに?君はついて行ったりした?

　さすがにしてないですね。

山：　今後は海外に行ってみたいと思います?

　機会があれば行きたいですね。例えばサクラマスなんかには挑戦したいです。

細：　最近、魚拓を見ない気がするのですが、今もやるんですか?

　魚拓?

細：　やったことは?

　僕はないです。

山：　今は写真があるからやらないんじゃないかな。

細：　最近、街中で魚拓というものを見なくなったなと思ってて。

山：　居酒屋とかにはあるかもね。食べる前に魚拓をとったりして。

細：　これまでの釣りで一番の大物は?

湖の名前は忘れたのですが、そこで 60cm ぐらいのマスを釣り上げたことがあります。芦ノ湖だったかな?

山：　陸から釣ったのですか?

いえ、船に乗って。

細：　60cm はマスとしては大物なのですか。

山：　60cm はだいぶ大きいですね。

細：　そういう大物を釣り上げたとき、さっきの魚拓の話とも関連するけれども、どうやって記念に残すのですか?

写真を撮って保存することが多いです。

山：　釣り研究部の合宿で最も大きかった魚は?

初めて行ったときに、下流で釣ったニジマスが一番大きかった記憶があります。

山：　部室に、バス持ちのように魚を持ち上げている写真が残っていて、あれはお兄ちゃんかな?

兄かどうかは分かりませんが、持っている魚はブラックバスではないかと思います。

細：　基本的にはキャッチアンドリリースなのですか?
場所によってはキャッチアンドリリース、海では食べたりしています。

山：　部の合宿の時は基本的には放してしまっている?

そうですね。兄の代では食べていたようですが、最近では場所の都合で食べられなくなってしまったと聞きました。

細：　部の合宿で魚をさばくのは誰ですか?

さばいたことはありません。

細：　大会では何かもらったのですか?

表彰状やトロフィー以外にこれくらいのクーラーボックスを。中学生もいるので、抽選でもらえるようになってます。

山：　文化祭での思い出とかありますか?

１、２年の時は、僕と石山先生の二人きりで準備した思い出が。１年生の時は２年生の部員が０で、３年生もいたのですが受験期だったので。ほとんど僕が金魚すくいとか水槽の準備をしていました。１、２年の時は金魚すくいをしました。

山：　なまずすくいをしたいとか。

まあ、やってはみたいですね。

細：　今後の釣り研究部の展望について何かありますか?

僕が入部する前の文化祭では、金魚の資料展示とかしかやっていませんでした。僕が入部してから金魚すくいとかやり始めたので、これからも金魚すくいとか実際の魚を見せる展示をして欲しいです。

山：　活動の幅をもっと広げるという点では?

夏合宿に限らず海釣りなど色々な釣りをしてほしいです。

山：　その時はＯＢとしてぜひ参加して欲しいと思います。

column　コーチングはアートである

森茂　達雄

“Coaching is art.” 英語圏ではヘッドコーチの手腕を評価するとき、しばしば使われる言葉です。日本の文化ではスポーツと芸術とはなかなか結び付かないし、むしろ、その対極にあるものとしてとらえられています。

私たちがアートと聞いて、まず思い浮かべるのは絵画や音楽といったものでしょう。現に日本人の文化として絵や音楽、お花やお茶などにはお金を払っても教育として受けさせたいと思う反面、なかなかスポーツを習うためにお金を払う意識は一般的にはなかったと思います。

それが最近、幾つかの競技スポーツにおいて、クラブやスクールと言った表現で報酬をとって競技スキルを教える団体が増えてきました。また、文科省やスポーツ庁は、放課後のクラブ活動を働き方改革の観点から教育活動から切り離して、クラブ指導員という名で外部の専門家（コーチ）にちゃんとした報酬を払って、スポーツ活動や文化活動を委託するという方向性を模索しています。

さて、それでは、コーチングと言う抽象的な概念のどこに「アート」が潜んでいるのでしょう。かつて、日本のスポーツといえば、監督がいて選手がいる。それで成り立っていました。しかし、現在は、中学や高校の部活動でもアシスタントコーチやトレーナー、ドクターなど、多くのスタッフが関わるようになっています。では、スタッフが増えることによって、現場にはどういう変化が起こるのでしょうか。

三人寄れば文殊の知恵、という言葉があるように、多くのブレーンが集まることによって、色々な発想ができるようになります。にもかかわらず多くの指導者たちは、自分のやりたいようにやりたいがために、これまでそのメリットを排除してきました。ところが徐々に、それでは間に合わなくなってくると、次の段階では、自分の扱いやすい人物をそばにおいて、役割を分担するようになります。しかし、本当に強いチームを目指すのなら、そこからさらに一歩進んで、好き嫌いは別にして、自分が思いもつかないことを発想できたり、自分にはない人脈を持っていたりする人を登用していかなければなりません。

そういう意味で、現在スポーツの世界で監督や GM に求められるものは、たくさんのブレーンや特殊な才能を持った人材をいかにマネージメントできるかどうかの見極めにこそ「アート」が生まれる余地があると思います。

また、コーチですからチームの戦術や戦略を練るのも当然の仕事です。戦術には絶対はありません。しかし、絶対を信じない者は敗北すると考えます。そこに、コーチングの「アート」が潜んでいるのです。

たとえば、大学でバスケットボールのトップレベルを経験した若い指導者が、理想に燃えて高校の指導を始める。なかなか勝てない。結果は旧式の「必勝スタイル」に押し切られる。妥協して目の前の結果を出しやすい戦法に走る。

でも、そのまま妥協していたら、志を裏切ることになる。たとえば、パワーに任せてゴール下をゴリ押しするスタイルに徹すれば、とりあえず地区予選は突破できる。じゃあ全国大会で、もっと体の大きい相手に勝てるのか。勝つことはできない。ここで志に立ち戻る必要が出てくる。何のために教員になったのか。自分の存在価値はどこにあるのか。そして「やはりパスで抜くスタイルを貫こう」「でもそれだけでは勝ちきれないから、ドリブルペネトレートも練習しよう」と考え直す。そうやってもがくべき事だと思います。そして、自分の戦術が絶対と選手に刷り込むことができれば、それは正に「スポーツはアートである」ことの証明だと思います。

つまり、一つ一つの練習をよりクリエイティブにすることで、選手に刺激を与えていき、そこで高いレベルのコーチングやティーチングを行えばそれ自体芸術性を帯びると考えます。日本では、未だに武士道精神が根強く残っていて、そういう意識が薄いのが残念だと思います。

穀物や野菜は育てることができるけれども作ることはできない。作る仕事はごまかすこともできるが、育てる仕事にはそれができない。つまり教育(コーチング)するという行為が美しくならないはずがない。

〔もりもたつお／日本バスケットボール協会Ａ級ライセンスコーチ・保健体育科教諭〕